

第五章

カルカッタのスラムと児童労働

——ハウラー橋からスラムへの道



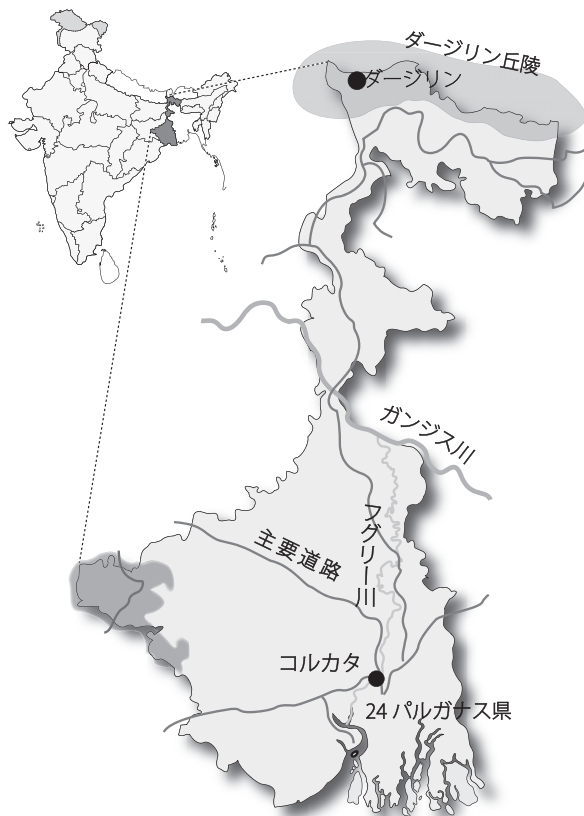
難民の終着点—ハウラー中央駅(左)とハウラー橋(右)

一 大都市のなかの「児童労働の地」

都市の誕生、拡大・発展、そして成熟というプロセスのいずれの過程にも都市固有の「雑業」が付随して発生する。途上国の開発論ではこれを、いわゆる「インフォーマル部門」と定義する、その特徴は、農村からの過剰人口が雇用と生存の機会を求めて絶え間なく都市部門に流入すること、そして、未熟練労働力として都市の経済活動に付随するあらゆる「雑業」に生存の機会を求める。生活の場合は路上もあり、またいわゆるスラムと称される「低所得居住区」がある。その規模は絶えず拡大を続け、都市問題とともに、深刻な社会問題を生む温床ともなる。生成の歴史的経緯からいくつかの類型がある。インドでは宗教巡礼地として発達した宗教都市、北インド、バラナシー（旧ベナレス）、通商・金融都市ボンベイ（現ムンバイ）、政治・行政の中心都市カルカッタ（現コルカタ）などである。都市の性格が施設や機能の違いをもたらすと同時に、そこに生活する人々のもろもろの「雑業」を生み出す。これが新たに流入する新規人口、とりわけ極貧家庭の子ども達が生きる数少ない生存の道といってよい。

本章は歴史的に形成され、今日ではすでにカルカッタ大都市圏の一部を構成するにいたつ

西ベンガル州



たシアルダー地区のスラムをひとつの事例としてとりあげる。ここで注目したいことは、①このスラム移住者と既定住者とのあいだを隔てる出身地文化の壁が歴史的経緯のなかで形成されたこと、そのために②スラムの内側に居住する子ども達を孤立・疎外させ、カルカッタ市民として、また同じベンガル人としての教育の機会を著しく阻害していること、そして③この孤立社会に生きる子ども達の労働を外部からの搾取の圧力から解放手段のないまま、下請け労働という名目の児童労働が日常化している現実がある。カルカッタという都市もまた、「児童労働の地」であり続けるのである。

叙述はわたくしが生活体験をもつ一九六〇〜六二年のカルカッタを回想し、いくつかのスラム形成期から今日にいたる間のスラム定着とその特徴を考察する。スラム形成の歴史的背景、社会的・経済的特徴などの理解が、なぜ、子どもは働かねばならないのか、なぜ、親は学校ではなく働くことを子どもに求めるのか、などの問題を考えるための大切な前提条件となる。そのうえで、わたくし自身が一九九一年以降七年間にわたって毎年訪問・調査を行ったスラムの一つ、シアルダー駅近くに広がるティルジャラ地区に見た「スラムのなかの教育と労働」の現状を紹介する。主たるテーマは都市における「スラム内児童労働」の搾取構造に関する興味深い事例である。

二 カルカッタのスラム形成——内側からの観察と体験

カルカッタはイギリス東インド会社時代（一六九〇～一八五八）、大英帝国第二の首座都市、「宮殿の街」（*City of Palaces*）と呼ばれた。一八世紀後半、カルカッタを訪れたイギリス人の画家・旅行家ウイリアムズ・ホッジス（*William Hodges, R.A.*）は当時、ロンドンを凌駕する白亜の建造物群をそのように表現した。また、政治、社会、経済のあらゆる分野でそのほかのどの都市よりも「優位性」を誇る大都市であった、とかれは旅行記のなかで書いている。そして、今は、西ベンガルの州都、スラムの巢食う「歓喜の街」（*City of Joy*）と呼ぶ。そして三〇〇年の間に幾たびとなく歴史の大変動を経験しながらも、人口一千万を超える巨大都市圏へと進化を遂げる。二〇世紀に入ると、ベンガル大飢饉（一九四三年）、インド・パキスタン分離（一九四七年）、そしてバングラデシュの独立戦争（一九七一年）など、政治と社会の大変動は数百万単位の難民を生み出し、そして吸収してきた。二一世紀のいま、すでに人口は一三〇〇万人を超える。スラム化した大都市圏の今がある。^①

カルカッタのスラム化現象は、歴史的には、一九四三年「ベンガル大飢饉」によつて爆発的に引き起こされた。当時、第二次大戦下のインドは情報統制下にあったこともあり、ベ

ンガル農村部を中心に三五〇万人に及ぶ餓死者を出した事実は知らされていなかったといわれている。「ベンガル大飢饉」と歴史に刻まれた悲惨なできごとがカルカッタ・スラムの形成と表裏の関係にあることを知るのはわたくしが一九六〇〜六二年、インド統計研究所 (Indian Statistical Institute) (現在国立大学院) の客員リサーチ・フェローとしてカルカッタに滞在していたときのことである。二〇世紀前半のベンガルが生んだ知性と評される統計学者 P・C・マハラノビス (P. C. Mahalanobis) が研究所所長である。当時、J・ネルー首相のブレインとして第二次五カ年計画の作成に当たり、その理論貢献は多くの海外学者をカルカッタに引き寄せた。あるとき、研究所敷地内の私邸に招待された。推計学の権威 (故) 増山元二郎先生を迎えての夕食会である。もう一人、所長夫妻と親しげに会話を交わしている一人の若いインド人研究者がいた。オックスフォード大学トリニティ・カレッジ (Trinity College) 在籍中でカルカッタ郊外のジョドゥプール大学 (Jodhpur) 経済学部教授と自己紹介を受けた記憶がある。その人は後にアマルティア・セン (Amartya Sen) と知る。「ベンガル大飢饉」の話題がでた。わたくしはまったくの無知であつた。第二次大戦中の英領インドのできごとでもありその事実を知るよしもない。当時、カルカッタの港湾施設は旧日本空軍の爆撃によって破壊され、船舶等の運送手段が壊滅的打撃を受けていたという。

「ベンガル大飢饉」は米・穀類等の絶対量の不足からではなく、ビルマ（現ミャンマー）からの輸入米を内陸部へ輸送する手段が破壊されたことが主たる原因だという。大飢饉は人々の想像を絶する規模でベンガル農村部を襲い、多数の村が消滅するなど餓死者の屍累々の惨状であつたことを聞かされた。所長P・C・マハラノビス教授はこれを人災ととらえた。戦時下という情勢を考慮してもなお、問われるべきことは餓死迫る数百万人の農民に対する英領インドの為政者や都市住民の無関心、米穀取引商人の貪欲な買占めなどがもたらした、という事実である。教授は推計学の手法を使って「大飢饉発生の周期性」を、医学者のグループは「ベンガル人の、大飢饉による体力劣化の数量的・統計的研究、将来に及ぼす影響」を、また、経済計画のグループは「飢饉と人間生存の最低条件」など重点的に研究をすすめた。「ベンガル大飢饉」を学問研究の世界に取り込んだもう一人の若い研究者がいた。カルカッタ大学プレジデンシー・カレッジ（Presidency College）を卒業し、その後、オックスフォード大学トリニティー・カレッジに在籍中のアマルティア・センその人である。かれ自身はカルカッタの北シャーンティニケターンに生まれるが（二九三四年）、かれの家族や親族は当時、東ベンガル、ダッカに生活の拠点をもち、ベンガル大飢饉や民族大移動の悲劇的な出来事を体験することになる。当時、かれは十四歳の少年であつた。かれ

の研究は後に、ノーベル経済学賞を受賞することになる。かれは若き日の「貧困研究」を通じて「人間能力平等主義」の信念を固め、人々が持つ天賦の能力を阻害する「機会の欠乏・喪失」こそ貧困の元凶だという考えにいたった。「ベンガルの大飢饉」から学んだ教訓の一つである。⁽²⁾

三 一九六〇年代のカルカッタ

ところで、ベンガル大飢饉につづいて、インド・パキスタン分離・独立（一九四七年）にともなう民族大移動と難民流入など、たび重なる大変動の直撃をうけたカルカッタはそのつど、不死鳥のように崩壊しつつある都市機能を蘇らせ、その都市空間は東西南北の全方位へと拡大を続けた。わたくしは一九六〇〜六二年カルカッタ滞在中、カルカッタを襲った大量難民のスラム化現象の余波がいまだ収束する気配がないころ、カルカッタの居住者としての生活体験をもつことができた。カルカッタ北部に集中するビクトリア様式の建造物の数々は崩壊寸前のありさまであった。市中央部には一九世紀「ベンガル・ルネッサンス」を支えた教育、演劇、社交などの施設・建物、すべてがその生気を失い、朽ち果てよう

としている。建物も、道路や小道も、一寸の隙間もないほど人間が支配し、やせ細った老牛と必死の生存競争をしている。これがわたくしの目に映ったスラムの街である。しかしあるとき、居住環境という都市の「形」だけにとらわれていた自分の視野の狭さに気づいた。スラムの町には宗教対立や民族紛争の悲劇を辛うじて生き延びた人々の生活史があり、そこには人間が生み出す新たな文化があることに気づいたのである。研究所の所在地バラックプル・トランク・ロード (Barrackpur Trunk Road) はガンジス川支流フグリー河 (Hooghly) の東岸、カルカッタ郊外を南北に走る幹線道路である【写真番号 05.011】。

その沿道両側をテント小屋が覆うように続く。難民の生きる空間が拡大しつつあった。古くは一九四三年の大飢饉によって村を追われた西ベンガルや近接するビハール州農民達がいる。多くは、一九四七年のインド・パキスタン分離にともなう民族大移動によって故郷の地を追われたヒンドゥー教徒達である。カルカッタの町に入ることかなわず、移動の途中、ついに歩みを止め、路上に根を下ろした無一文の農民家族であった。この光景はわたくしの滞在中、二年間変わることなかった【写真番号 05.009】。

わたくしのスラムを見る目は変わった。そして、二つの発見があった。一つは、「カルカッタの聖牛論争」。二つは「カルカッタの精神風土——混濁と秩序の共存」。そのきつか

けはP・C・マハラノビス教授主催の夕食会での談論に始まる。わたくしは帰国後に記した小著『インドの経営者』（アジア経済研究所、一九六六）のなかで当時の様子をつぎのように記した。

* * *

ベンガル特有のむし暑いモンスーンの季節がやがて終わろうとする一九六〇年九月ごろであった。わたくしが滞在していたカルカッタのインド統計研究所には、かつてインドの第二次五カ年計画草案の作成に協力した西欧の一流経済学者が集まっていた。ある日所長のマハラノビス教授の私邸で遠来の客を迎え、盛大なレセプションが開かれた。……教授夫妻を囲んで世界中から一堂に会した著名な学者達の歓談がはじまった。たまたま話題は、インド人の栄養水準の問題になった。西欧のある学者は、マハラノビス教授に質問というより批判めいた意見をもらした。

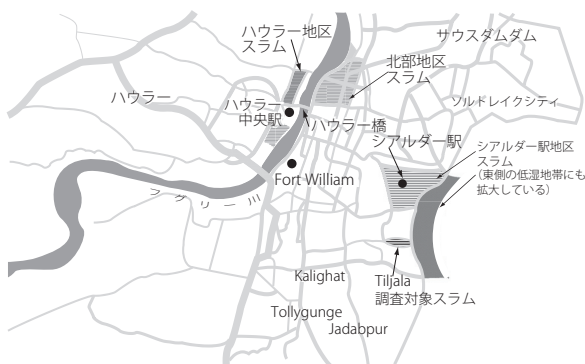
「なぜカルカッタの町を『放浪』している牛を食用にしないのか。もし、これを食肉にすれば、カロリー摂取量は相当高まるのではないか。生きるか死ぬかの極限状況にあつて、宗教上の理由で牛を食わないというのは理解に苦しむ」と。教授はおもむろに、「あなたの

言われることはよくわかる。しかし、もし時間があれば町に出て牛のあとをつけてみなさい。町の往来にたむろする無数のやせこけた牛も、夕方になればビルのそこに住む持ち主のところに帰る。食物が与えられ、牛乳がしぼられる。家族のために牛乳を補給する大事な牛であり、財産であることがわかるでしょう。このやせ細った牛もそれぞれ大切な役目を背負っているのです」と。この聖牛論争では、西欧の経済学者の説く経済的合理主義は、インド人の複雑でそれなりに十分根拠のある社会生活の秩序とその仕組みを理解できなかつたようである。

* * *

その経済学者はポーランド人、M・カレツキ (M. Kalecki)、六〇年代の開発論をリードした社会主義経済学者であつた。マハラノビス教授は「追いつき、追い越せ」の急速な工業化を追求する立場である。これに対して、この東欧の経済学者は国民一人ひとりの富の豊かさ、そして分配の公正を最大の価値と考える社会主義経済思想の持ち主として知れる。談論にはそのほかにイギリス人のT・バロー (T. Balogh) やポーランド人のI・サフス (Ignacy Sachs) など、戦後、黎明期の開発論に名を残す碩学の顔があつた。初めて訪れたカ

コルカタ市街地図



ルカッタの悲惨な現実をみて言葉を失っているかのようにあり、終始、議論を聞く側に沈黙していた。

二つ目の発見はカルカッタの精神風土についての解釈である。カルカッタ探訪で歴史の証人、古色蒼然としたグレートイースタンホテルに束の間の休息をとったことがある。当時、「飲酒許可書」をもつ外国人だけに許されたバーがここにある。一九世紀半ば、反カースト運動に身を投じた、ブラーマン（カースト階層の最高位に位置する人）の若きベンガル人がこよなく愛した、「ビールとワイン」を提供するレストランがある。当時はウィルソンホテルとよばれていた（Samuven Roy 前掲書一二ページ）。伝統的なベンガルブラーマンの

戒律を破った若者の一群がこいギリス人の集う場所に食をとにしたという秘話を知った。これに感動を覚えた記憶はいまも、この由緒あるホテルに宿泊するたびによりみかえる。

カルカッタの精神風土には伝統と改革、漸進主義と急進主義、精神主義と世俗主義がいわば混濁の渦となつて今に生き続けている。そして、秩序的とも思える定常状態を作り出している。今も理解ができない市街地風景がある。長い年月をへても、わたくしの脳裏に残像として消えることはない。それは、一年中毎日のように、場所を選ぶことなく繰り広げられる市民や労働者の賃上げ要求のデモ行進である。そして、平然としてこれを無視する州の共産党政権の存在がある。カルカッタはデモ行進の街とも言われたほどの混沌がみなぎる都会でもある。そのころ、市街地の南部郊外地区ではスラム居住地の土地所有権をめぐる争いが熾烈を極め、騒然とした日々が続いた。歴史上、世界にその類を見ない大規模な「民族大移動」の舞台、それからわずか十年しかたない時期にわたくしは、市街地の混迷とは無縁の静かな研究所のなかで生活していたのである。スラム一帯には難民の生と死の闘いがあつたころの話である。依然として世情不安の漂う時期であつた。

カルカッタ市街地とフグリー西岸のハウラー地区を架ける壮大なハウラー橋 (Howrah Bridge) と近接するハウラー中央駅 (Howrah Railway Station) は都市「児童労働の地」のイ

コンと映る。「ベンガル大飢饉」から追われたベンガルやビハールの農民の終着駅であり、スラムへ向かう新たな道の出発点となる。かれらの目には確かな生存が約束された「聖画像」と映ったに違いない。いまでも経済難民の流れは続く【写真番号 05-038】。

作家ドミニク・ラピエール (Dominique Lapiere) が描いたノン・フィクション『歓喜の街』(City of Joy)の舞台となるハウラー地区スラム街がすぐそこにある。

三〇〇年前「宮殿の街」と形容された市街地の中心部を歴史探訪することが多くなった。イギリス東インド会社の官吏や商人が住処とした白亜の殿堂の数々、今は主人公がインド人に入れ代わっただけの統治の館となる。これと対照的な光景が東側一帯に広がる。シアルダー駅舎 (Sealdha Railway Station) と操車場に近接して広大な居住区がある。その地域一帯はソルトレイクとよばれる低湿地の荒廃地、ここにカルカッタ最大規模のスラム街がある。正確に言うと、一九四七年の民族大移動によって流入した難民の仮設の収容施設が設けられた広大な地域である。難民は現在のバングラデシュ国境に沿う狭軌鉄道を使い、あるいは徒歩でブラックポール幹線道路を南下し、やつとの思いで生活の居を見つけた幸運な人達であった。そしてスラム街を作り上げたのである。一九五〇年、マザーテレサ修道女は「神の愛の宣教師会」 (The Charity of Mission) を設立、この地に難民救済の事業を進



写真：カルカッタ シアルダー地区 ティルジャラ・スラム
撮影：筆者【写真番号 05_034】

めていた。

カルカッタ市街地の南、バリガンジ (Barliganj) 一帯には新しく宅地造成が進んでいる新開地がある。当時の英字紙は毎日のように、ここスラムの地に土地をめぐる騒動や犯罪事件が頻発していることを伝えていた。危険地帯である。わたくしは研究所の友人と一緒にこの地を歩いたことがある。住民の鋭いまなざしは外部からの侵入者に対する敵意とも感じさせる警戒心にあふれる。居住環境も治安も極度に悪く、想像を絶する世界に身の震える思いをした記憶が残る。インド独立の前年、一九四六年八月一六日、「カルカッタの大殺戮」(The Great Calcutta Killing) が行われた舞台を見た。難

民が定着してわずか十数年経過した時期である。

四 一九九〇年代のカルカッタ

今、カルカッタは大会に根付いた「児童労働の地」である。スラムという居住空間に生きる家族と子どもがいる。路上に姿をみせる雑業の子どもはストリート・チルドレンのレッテルがはられる。居住はスラム地区、両親や家族と同じ居住の場がある。日中の労働・作業の場が路上にあるという。スラムを構成するのは家族である。この単純であるが、重要な視点をわたくしにあらためて確認させたのはあるビハール出身の家族との出会いである。外国人の目には見えないスラムの内なる世界があることに気づいたことがある。それは都市空間の内部に持ち込まれた伝統の農村生活の姿を見たときである。一九九〇年代はじめ、最初に訪ねたスラムは市街地の北にある小規模な居住空間。ビハール出身の住民が定着した一帯である。かれらは一九四七年「民族大移動」の流れに先立つ、一九四三年「ベンガル大飢饉」が生み出した難民家族の第二、第三世代と思われる。住居はベンガルのどこにでもある農家の住まい。わらぶき屋根、外壁はカウダン（乾燥牛糞）を塗り込み、白色



写真：マドゥーバニ民俗画 手漉き紙（乾燥牛糞処理、サイズ 53×72 cm）

作品：「乳牛の尊崇」（Veneration of Mother Cow）

画家：Vidya Devi and Dhirendra Jha

提供：Exotic India 画廊

の染料で塗装した家屋がある。入り口は褐色のカウダンで堅く固められたスレート状の、光沢に輝く足踏み場がある。外壁には花・鳥の絵一対が描かれている。室内には土間の上に竹製ベツド二対と料理道具一式の棚だけの家財道具がある。そして、壁には厚紙に書かれた絵が一枚、神話の神々が描かれている。これはビハール州北部マドゥーバニ県（Madhubani）の伝統的な農村婦人の民俗画だと聞く。この光景はわたくしの遠い記憶を呼び覚ました。再び、一九六一年、北部ビハール州の調査旅行の記憶がよみがえる。

わたくしの宿舎インド統計研究所ゲ

スト・ハウスの滞在客の一人、ビハール州政府次官補・統計局長ラール氏 (Lal) と懇意になった。わたくしは当時一緒だったアジア経済研究所図書資料部(故)松谷賢二郎氏の資料収集活動に加わり、ビハール州政府の資料収集をすることになった。統計局長に相談すると快く便宜供与を約束してくれた。州都パトナー市の政府出版物倉庫に入り、二人で手当たりしだい政府刊行物を選別した。長い年月埃に埋もれていた二〇世紀初頭の国勢調査統計類、Imperial Gazetteer (地誌)、地方誌などを集めた。なかには二〇世紀初め当時のイギリス人行政官(民俗学者)が書いた北ビハール地域の民俗史の本があった。驚いたことにすべての政府刊行物は出版時の定価わずか数ルピーで買うことができた。統計局長の自宅に招待をうけた。そこでわたくしは一つの発見をした。壁にかかった一枚の絵に吸い込まれるように見入った。農村風景を描いた素朴で、しかも力強いタッチのデッサン風の絵である。説明によるとこれはビハール州の北部、ネパール国境までおよそ三〇キロのマドゥーバニ県の農村婦人が描く伝統的な絵だという。わたくしはパトナー市での資料収集のあとに北ビハールを訪ねる予定があつた。わたくしの目的地はM・ガンディーの指導した「小作料引き下げの大衆運動」の舞台、チャンパラン (Champaran)。統計局長の取り計らいによって全行程公用車の提供を受けた。それぞれの宿泊地点では公務員用巡回宿舎、サーキッ

ト・ハウス (Circuit House) の手配など、トップの一声がすべてを即決する官僚国家のすごさを知ることになる。局長の薦めもあつて途中、ダルバーンガ県ともうひとつマドゥーバ二県のいくつかの農村家屋に足を止めた。後に、この地が独特の農民芸術をはぐくんだ農村地帯であることを知る。マイティリー方言 (Maithili) というベンガリー語と並ぶビハリー諸方言の言語系統に属する東部諸語の一つに分類される言葉が使われる。そして民俗画、「マドゥーバニ絵画」として、世界のコレクター垂涎の絵画を生み出す土地であることを知る。それはずっと後のことである。今は、この地方一帯をさして「ミティラー芸術」の地と呼ぶ。ここでの見聞は強烈であつた。絵画については無知同然であるが、農村婦人が生み出す伝統の力、それを守り続ける社会の強靱性は何に由来するのだろうか、と考えるようになった。歴史に刻まれたチャンパラン事件の一帯。経済的には極貧の地。おそらく、インド全土で最も困窮の地に違いない。しかし、二千数百年の昔には王国が栄えた歴史がある。独特の言語を持ち、カースト制と職業をかたくなにまで守り続ける農村社会がある。ヒンドゥー教と初期仏教の信仰が村の精神そのものという。そこに生まれ育つた農村婦人による「ミティラー民俗画」。各々が調和を保ち、均衡を維持している社会といえないだろうか。家長は川魚捕りと畑仕事に（第一ブロック）、婦人は家事を（右から第二ブロッ



- ④子どもは川で牛の水浴び(労働) ③母親同士のおしゃべりタイム(育児・余暇) ②食事の支度(家事) ①男の屋外労働(薪拾い・魚獲り)

写真：マドゥーバニ民族画 手漉き紙（乾燥牛糞処理）（サイズ24×79 cm）

題名：「ミティラー地方日常生活のダイナミズム (The Dynamism of Daily Life in MITHILA)」

画家不詳

提供：個人蔵 Exotic India画廊

ク)、そして余暇を近隣友人との会話に(右から第三ブロック)、そして子ども達は家畜の世話を(第四ブロック)、それぞれが役割を分かちながら、質素な生活のなかに家族が一つになる。これが始めて見た農村社会の姿であった。わたくしはこの姿を「定常状態の社会」と考えた。

わたくしが始めて歩いた北ビハール州一帯、とくに、現在のマドゥーバニ、ダルバンガ、チャンパーランはカルカッタの大会を多少体験したものにとつて息が止まるような静寂の社会に映った。わたくしはこれを「定常状態の社会」と考えるようになった。当時、経済学者が好んでつかう、停滞的、あるいは後進的社会とはその意味をまったく異にする社会を感じとったからである。北ビハールを歩いた印象は農村社会を構成する人、物、関係、精神といった個



写真：マドゥーバニ民俗画、手漉き紙（乾燥牛糞処理）（53×74 cm）

作品：「ミティラー地方日常生活のダイナミズム」(The Dynamism of a Daily Life in MITHILA)

作者：Vidya Devi & Dharendra Jha

提供：個人蔵 Exotic India画廊

別の要素が均衡状態にあつて、しかも静止した状態におかれている、このような農村社会像であつた。経済発展や成長という概念とは無縁の世界がひろがる農村の姿があつた。そのような社会であるからこそ農村婦人の素朴で、神秘性の高い「ミティラー民俗画」が世上の注目を浴びたに違いない。いまもこの見方に変わりない。あるミティラー民俗画家はその農村社会を「ミティラー地方日常生活のダイナミズム」と表現した。わたくしはそのシンボリズムを「静止と躍動」ととらえた⁽³⁾。

五 都市化のなかの「農村化」

「定常状態の社会」のイメージが脳裏に焼きついて離れない。この記憶がいま、カルカッタのスラム街の一角によみがえる思いがする。住民はこの地域の出身という。すでに故郷を離れ、カルカッタの市民の一人として定着した難民第二、第三世代である。しかし、かれらの生活文化は消えることはない。都会のなかの農村生活、「定常状態の社会」がある。都市化のなかに農村化現象が進む。居住者は同じ血縁や地縁、さらに同じカースト階層（農民）によって同質的なスラム集団を構成する。北カルカッタの一角にはマイテリー方言を日常語とし、北ビハールの食習慣を守り、故郷の氏神崇拝や結婚・葬儀などの祭祀を共通にする集団がいる。生活の外見はスラム街の一部だが、集団の組織原理は共通の祭祀にある。大都会カルカッタはじつに多様な文化背景をもつ移住者集団から成り立っている。大別するとおよそ四つの巨大スラム地域がある。

一つは、「ハウラー地区」。市の中心を南北に流れるフグリー河（ガンジス川支流）の西岸地帯、主として西ベンガル州の農村や隣接するビハール州からの移住者が多い地区。農村の疲弊・荒廃がはじき出した貧農の家族から構成される。作家ドミニク・ラピエールの描



写真：スラム内の路上でゴム草履（チャップル）成形作業に従事する幼女

撮影：筆者

提供：筆者

く「歓喜の街」の舞台がここである【写真番号 05-012】。

二つは、「カルカッタ市街の北東一帯」。一九四三年のベンガル大飢饉の犠牲者達が定住した地域がある。第二、第三世代の住民である。往時とくらべ、すこしでも生活環境が改善されたという風景はない。住民の世代は交代しても貧困は継承されている。とは思えない。それが六〇年代のはじめ、二年間の日々を過したカルカッタ北部の郊外に広がる姿である。

三つは、「市街地の南外延部一帯」。民族大移動によって発生した大量難民の、今は第二、第三の世代が定住する地域。かれらの社会・経済的背景は他のスラムと異なる。

社会的には上位カースト階層の、ブラーマン、クシャトリアが多く、インド・パキスタン分離までは当時の東ベンガル（現在のバングラデシュ）に土地資産を所有していた比較的裕福な階層のヒンドゥー教徒達が主な住民である。彼ら自身の自尊・自立の意思がスラム街建設の原動力となった。

四つは、「シアルダー地区」。同じ時期、南部に定住を始めた難民とは社会的、経済的背景の違う巨大な難民の集団がある。多くは農民や最底辺の社会階層に属する人々の集団であり、市の東側に広がるシアルダー地区に集中する。そのなかの一つテイルジャラと呼ぶ一帯、人口約三万人が住む町がある。

三〇〇年前には「宮殿の街」と称された都市中心部は今、およそ四つの巨大なスラム居住区で囲まれた巨大都市となる。それは作家ドミニク・ラピエールの表現によれば「歓喜の街」へと進化を続ける都市であり、わたくしの表現では飢餓的貧困という分厚いカーテンに囲まれた「児童労働の地」と称しても過言ではない。⁴

六 スラムの町テイルジャラへ

居住区としての特徴をあげると、まず、物理的な閉鎖性がある。三万人ともいわれる住民の住む敷地一帯は一本の通路だけが近くを通る公共道路と結ばれている。周囲は密集した別のスラム居住区、マザーテレサの奉仕活動の舞台である。このように物理的に隔絶された居住地区には住民の経済的・社会的な同質性、そして外部社会に対する敵対的な閉鎖性がある。歴史的なスラムの成り立ちを考えれば理解できるが、とくにこの一本の小道がひとつのコミュニティとして内部に向けて団結を、外部に対しては警戒を象徴することを見出すにはさほどの時間を要しなかった。一九九一年以来、毎年のスラム訪問によってわたくしはいつしか、スラムの内側から問題を見る視座に違和感をもつことはなくなっていた。すでに述べたように、「民族大移動」によってやつとの思いで生き延びた人々の心に他者に向ける本能的な排他性と敵対性が生まれるのは自然であろう。それはスラムが長い年月をかけて醸成した「社会的感性」というべき独特な空気である。^⑤

わたくしの対象とするスラム、テイルジャラ町とは対照的に、南カルカッタに広がるスラム街には独特の空気が感じられる。それは外部に対する極端な警戒心と猜疑心をあらわ

にした今に残るスラム住人の心の闇である。インド・パキスタン分離によつて故郷の土地財産すべてを奪われ、命からがらの逃避行の末に見いだした第二の故郷たる土地である。それは荒廃地となつていた広大な公共用地の湿地帯であつた。独立直後の無政府状態のなか、自力のコロニー建設が始まる。警察としばしば武力衝突を起こした。先住のベンガル農民と土地所有をめぐる争奪がくりかえされた。自衛組織をつくり、実力をもつて自らを、家族をそして子どもを守る意思を備えた先鋭的集団の誕生があつた。かつては土地を所有する中流階層の、教育のあるヒンドゥー教徒が主である。ブラーマンやクシャトリヤの上位カースト階層に属する人達から構成される。スラム建設を実現した第一世代は半世紀以上を過ぎ、今（当時）は第二、第三世代への交代が進行中である。このスラムを覆う空気、それはここの住人が体験した辛苦の難民逃避行がかもしれない。スラム特有の「社会的感性」と呼ぶこともできると思う。

第二の特徴は社会的、経済的な孤立状態がある。住民三万人が互いに結束し集合体を作りあげる背景には、難民共通の歴史体験（一九四七年民族大移動）があり、共通の故郷と祭祀（元・東パキスタン、現・バングラデシュ）がある。強い連帯感、相互扶助の伝統がある。反面、物理的に自らの居住区域をほぼ、閉鎖状態にしたことにより社会的にも、また経済

的にも孤立することになる。これを都市機能の二重構造としてみると、三〇〇年の長い都市形成の歴史が生み出した社会・経済の「中心的機能」に対して、間断なく不熟練の労働力とサービスを供給する周辺都市（地域）の「従属機能」が並存する。初めに述べたように、都市生活に付随するあらゆる「雑業」は不熟練労働者の低賃金によって成立している。スラムから供給される不熟練労働力の流れは絶えることはない。一方では、子どもや家庭の主婦はスラム居住区にもちこまれる「雑業」の下請労働によって生計を維持し、外部から隔離されたスラム内労働の「市場」を拡大する。以下の事例はこのような姿を素描した聞き取り調査の記録である。⁶⁾

七 スラム内児童労働——その現実

インタビュー調査はNGO・CRS (Cathedral Relief Service) の全面的な協力を受けて行われた。スラム関係者への事前の手配と日程調整が行われ、また、通訳（ベンガル語・英語）二名の派遣があった。調査の時期は一九九七年二月十九、二〇日の二日間、酷暑の時期である。対象はNGO CRSが運営する非正規の低学年学級に通う子ども三九人と親六

人、相対の聞き取り調査である。質問の項目は子どもに対しては、年齢・家族数・仕事の種類・一日の作業量・賃金・将来の夢・その他など、また親に対しては、月収（ルピー）^{*}、子どもの収入・生活費の支出・子どもへの期待、などである。

スラム内にみられる下請け労働は二つの製品加工作業が大部分を占める。一つはチャップル（ゴムサンダル）の成型・加工、二つは運動帽のツバ糊づけ。前者は半ダース、ないしは一ダースのサンダルが一枚のゴム盤に成型された未加工品である。作業はハサミで切り取り成型するという単純労働となる。後者は帽子本体とつば一組の、糊付けの作業である。その多くはスラム外部の作業場から、あるいは、スラム内部に設けられた作業小屋（手動成型機一、二台の設備）からブローカーを通じて子どもに手渡される。これらの未加工品を扱う業者は複数あり、最終製品の発注先は明らかにされない。わたくしはこれが国内最大のブランドを誇る靴メーカーであることを知ることができた。働く子ども達はもちろん知る由もない。

スラムの都市居住空間は家族という一単位的生活領域にも画一性を見ることができ。生活空間は平均して六〜八畳程度の広さ、六、七人が生活する空間である【写真番号 05.018】。

^{*} 当時の交換レート—— 1ルピーは日本円約四円相当。 1パイサ Paise = 100分の1ルピー

これが各棟レンガブロック建ての長屋で構成され、広大な敷地をとる狭しとばかり小道の迷路で連結される【写真番号 05.020, 044, 046, 057, 060, 065】。成人男子は市内の「雑業」に労働の機会をもとめ、スラムに残る成人女子は育児・家事雑用、そして学齢期の子ども達はスラム敷地内の路上あるいは、自宅で「雑業」に励む。これが一家の生活風景である。子どもの労働はスラムの外部から持ち込まれる下請の仕事。与えられた出来高払いの労賃と仕事量に対して労働条件を選択する余地はない。強制労働に等しい姿がある。国内で著名なブランド商品靴メーカーの発注する下請工程の一つを担う労働の現場は自宅前の路上にある。その作業に当たる子ども達は明らかに四、五歳の幼女達である。そこには外の世界から孤立したスラム内の児童労働の現実があることを知る。調査に応じた子どものプロフィール、労働に励む子らと学ぶ子ら、そしてその親達の苦しい選択を素描する報告の一部を紹介する。初めに、調査に当たった日本大学生の感想を紹介しておこう。

①子どもの顔 「スラムとはどんなところか、初めて入る世界に少し不安を抱きながらバステイー〔スラムのこと〕へと足を踏み入れた。想像以上に人々は明るく、とくに子ども達は少し照れながらも、とてもひとなつつく私達に近づいてきたのが印象的だった。

子ども達はパワフルで好奇心も旺盛、将来にもしつかりと夢をもって働き、しかも勉強が好きだという。親にとってはまさに理想的な子ども達ではないかと思う」

②働く子ども 「目にも止まらぬ速さでチャップル・カッティン^{*}グする姉。一日わずかな量しかできないが、『私もできるのよ』と胸をはる妹。幼いころから働いて、家計をささえている光景を目の前にしたが、このバステイー「スラム」では日本で想像していたほど児童労働の暗さはなく、仕事が好きだと答えた子どもが多いのが意外だった」

③学ぶ子ども 「子ども達が勉強に対して予想以上に強い関心をもっていることに驚いた。『もつとたくさんのことを学びたい。勉強は仕事より好き』と、多くの子どもが答えた。もつと勉強したいと言っているこれらの子ども達が教育の機会を多く得られることを願う。^{**}そして、一人でも多くのこどもが夢を持ち、その夢に向かって幸せな人生を歩んで欲しい」

④親の苦しい選択 「インタービューした親全員に共通していることは、子どもに対する

* ゴムサンダルの成型後に残る縁取り部分をハサミで切り取る作業のこと

** NGO・CRSの運営する非正規授業、午前組と午後組の二部授業。小学低学年レベル（英語・ベンガル語読み・書き・計算・社会など）

深い思いであった。生活の苦しさのために子どもを働かせなければならず、もし今より
もすこしお金があれば、仕事はやめさせて良い生活をさせたいと願っている。好んで子
どもを働かせているのではなく、それしか家族が生活していく方法がないのだ」

八 スラム 三つの鎖

—— 女児労働の市場、教育機会の喪失、慢性的な飢餓的貧困

まず、この地区に固有な子ども労働実態について考えてみたい。労働需要の側面につ
いて注目することは反復・単純労働という作業の特徴がある。チャップル・カッティングと
呼んでいる半加工サンダル盤の成型作業が主たる労働内容である。半ダースまたは一ダ
ースのゴムサンダルが型打ちされている一枚のゴムシートからサンダル部分をハサミで切り
取り、縁取りなどの処理をする。幼児でも可能な作業内容にみえる。事実、学齢期前のお
よそ二、三歳の女児がスラム内の路上で器用にハサミを動かしている情景を見た。この作
業の反復・単純性が主として女児、さらには幼児さえも労働に駆り立てる要因となってい
る。この作業の単純性に着目すればシバカシ村のマッチ工女、花火工女の労働実態と同じ

である。しかし、労働の組織という点では工場労働者という拘束のもとに置かれるため強制や搾取をともなう労働実態となる。これは第二章でふれた通りである。ところが、ここスラム内児童労働がほかの事例と異なるのは、「スラムという一大工場」のなかで子ども達は生まれ、育ち、そして、教育の場ではなくゴムサンダルをつくる仕事場に向かう、厳しい幼児生活を余儀なくされていることである。それが唯一の生きるための道ということである。注記(7)「子どもの労働実態」を一瞥するだけでスラムの子ども達には労働の道以外に幼少期の生活はありえないことがわかる。教育の機会を喪失した社会に生きる、その数およそ六〇〇〇人ともいわれる、巨大な不就学の子ども達である。ティルジャラ・スラムには幸運にもNGO・CRSの非正規義務教育の二部授業がもうけられ、限られた授業科目ではあるが子ども達に最低限の基礎教育を提供している。スラムという社会的・文化的に孤立し、外部社会から疎外された子ども達に最低限の必要な教育資源を投入している活動に善意の市民援助の手が差し伸べられることをあらためて願わずにいられない。

さて、教育機会の喪失という状況とともに、三万人とも推定されるこのスラムの家計を覆う慢性的な貧困状態がある。大多数の住民は歴史的経緯から資産をもたない、未熟練労働の家族からなる。家族数八、九人の規模は普通である。いうまでもなく生存の限界に

表4. 飢餓的貧困化の家計水準

対象	年齢	家庭の 収入	一人当たり の生活費	子ども の収入	子どもの 家計貢献度
1.主婦	45歳	1250 Rs.	約200 Rs.	650 Rs.	50%以上
2.主婦	50歳	1,150~ 1,400 Rs	170~ 200 Rs.	00 Rs.	約70%
3.主婦	32歳	950 Rs.	140 Rs.	550 Rs.	約60%
4.主婦	26歳	1250~ 1,650 Rs.	250~ 330 Rs.	300 Rs.	約20~25%
5.主婦	30歳	1,100 Rs.	160 Rs.	160 Rs.	約16%
6.父親	50歳	1,000 Rs.	200 Rs.	330 Rs.	約33%

注：単位はすべて1ヶ月あたりルピー。邦貨換算：1 Rs.=約4円（1997年2月現在）

出所：聞き取り調査に基づき筆者作成。

近く、さらには飢餓的状況に日々を生きる貧困人口。これがスラムの町の表情であり、半世紀を経過しても変わることのない現実といってよい。この間、世代はいくつか替わるが返済の見込みのない債務だけは引き継がれる。スラム住民六人の家計水準を表4に示す。

ここで注意するのはインタビュー調査に付きものの、収入・支出の貨幣タームによるデータの信憑性の問題がある。わたくしの経験によれば、質問者の意図や目的に応じて回答者の対応が大きく異なる場合が多い。ここでは相対の質問形式をとっているのでおそらく、大きなバイアスはないと思われる。データの読み方は「家庭の収入」と「子どもの収入」の両者については相対値の幅を、また、「子どもの家計貢献度」は一応、五〇%前後を目安として収入・支出のレベルをみることにする。「子どもの収入」は恐らく一人だけの稼ぎでは

なく複数の子ども総出の収入であろう。子どもへの質問では最高でも月二〇〇ルピー以上を稼ぎ出すことは稀有であることがわかる。子どもを総動員しての家計補助であり、その上に家族の生活が成り立っていることを如実に示している。これらの家計支出の数字に現れない債務の重圧があることも忘れてはならない。このような家計水準では子どもの稼ぎは不可欠という経済的理由が児童労働の原因となることは事実である。しかし、ここでは作業の形態が単純・出来高請負であるため、勉強の合間をぬって仕事をするという、いわばフレックス労働が可能となるから、多くの子ども達はC R Sの二部授業に通う。勉強熱心な、知への探究心旺盛な子ども達が多い。公教育偏重政策の欠陥がこのような不就学児童の存在を許していると思えない。公教育の質の問題を考えると、非正規教育の機能をさらに強化し、まさに初等教育のベーシック・ミニマムを創出するときではないだろうか。ティルジャラスラムの「教育と労働」の事例がこの点での有効な示唆を示していると考ええる。働く子ども達の顔は明るい。未来を見詰める力にあふれる。子どもが生まれながらにして備えた潜在能力を読み取ることができる。

子どものあこがれの職業をみると、一位教師、二位医師、三位弁護士、四位警察官、その他エンジニア、看護婦、ビジネスマンなどが続く。スラムの日常生活のなかでイメージ

する将来の職業であり、限られた職域ではあるが幼くして明確な目標を定めていることに一縷の望みを感じる。

物理的、社会的に半ば孤立した社会のなかにありながら外に向かう子ども達の「世界観」は、たとえ非正規教育とはいえ次第に「知への意欲」をかきたて、みずからの人生と世界への「知の探求」への道を広げるに違いない。カルカッタはかつて、十九世紀ベンガル・ルネッサンスと呼ばれた文化再生の経験を経た子ども達の挑戦にふさわしい「知の都市」である。それらを開花させる道はこのスラムの町ティルジャラにもあるはずである。一九九一年から八年間、毎年通い続け親しくなった家族や子ども達一人ひとりに別れを告げるとき、わたくしはアマルティア・センの言葉を心のなかで贈った【写真番号 05.055】。機会の欠乏こそ貧困の元凶であり、人間能力平等の思想こそ経済と社会の進歩・発展を実現するエートスだ、と。彼は一九三四年、英領インド、カルカッタの郊外シャーンティニケターンに生まれ、ジョドゥプールに育ち、そして学んだ。ここ、ティルジャラのスラムはジョドゥプールからそう遠くない距離の町である。世界に誇るノーベル経済学賞受賞者の知性のメッセーじがいつか、このスラムの子どもの心に届くに違いないことを信じる。子ども達の顔にこのメッセーじの意味を幼くして理解できる潜在能力のあることを読み取ること

ができたからである【写真番号 05-004, 010, 014, 019, 024, 036, 040, 058, 060, 061, 064, 067, 070, 071】。

注(1) 宮殿の街

カルカッタの名称は二〇〇一年、ベンガル語表記のコルカタ (Kolkata) に変更された。本章の叙述は旧称が使われていた期間が主要な内容となるので原則としてカルカッタの名称を使うことにした。また、ここではスラムという通俗的な呼称をカルカッタの、ある居住地域や空間を指して使用している。地元ベンガルの人々は「ボシュティ」(低価格居住区)と呼ぶ(アジア経済研究所研究者の指摘による)。スラム形成の歴史的背景を含意する適切な用語がないまま、あえてスラムという用語を用いることにした。

「宮殿の町」から「歓喜の街」への変貌を知る上に参考となる文献を記す。

①英国人画家 William Hodges, R. A. 著。一八世紀後半(一七八〇、一七八一、一七八二、一七八三年)、全土を旅行した記録と版画絵(二五枚)を収録。 *Travels in India During The Years 1780, 1781, 1782 and 1783* (London: Pall Mall, 1794) 詩情あふれる旅行記であり、当時を伝える貴重な記録である。初版本、一七九四年版は慶応義塾大学三田図書館所蔵。復刻版は一九九九年、Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd. (New Delhi) から出版。

②カルカッタ建都三〇〇年記念出版物。J. P. Losty, *Calcutta: City of Palaces, A Survey of the City in the Days of the East India Company 1690-1858* (London: The British Library, Arnold Publishers) 著者は大英図書館 Curator 兼、Pratapadya Pal, editor., *Changing Visions, Lasting Images CALCUTTA through 300 years* (Bombay: Marg Publications, 1990).

③作家 Samaren Roy, *Calcutta: Society and Change 1690-1990* (Calcutta: Rupa & co., 1991) カルカッタ小史。
④作家ドミニク・ラピエール長谷泰訳『歓喜の街カルカッタ』上・下 (河出書房新社、一九八七)。フグリー地区のスラム街描写は圧巻。

(2) ベンガル大飢饉

Amartia Sen, *Poverty and Famines: An Essay on Entitlement and Deprivation* (Oxford: Clarendon Press, 1981) および *India: Economic Development and Social Opportunity* (Oxford: Clarendon Press, 1995) (Jean Dreze と共著)。
Gurcharan Das, *India Unbound: The Social and Economic Revolution from Independence to the Global Information Age* (New York: Anchor Books, 2002), pp. 5-7.

(3) 定常状態の社会

珍しい小冊子二点を掲げる。

Kamal Shankar Sivastava, *Art of Mithila* (New Delhi: Book Faith India, 1999).

Ram Dayal Rakesh, *Folk Festivals of Mithila* (New Delhi: Book Faith India, 1998).

(4) NGO の教育支援活動

わたくしは一九九一年以来一九九八年までの間、毎年、当時所属する明治学院大学国際学部 of 教育プログラムの一環としてこのスラム、ティルジャラを訪問してきた。ここにはセント・ポール大聖堂 (St. Paul Cathedral) の付属奉仕団体 C R S (Cathedral Relief Service) が運営する小学低学年の学級が設けられ、また、成人女子を対象とした手芸など、自立支援の職業訓練プログラムがある。これは NGO がカルカッタの全域で運営する十三の支援活動のうちでもっとも規模も大きく、とくに義務教育を受ける機会のない低学年の子ども達に教育に重点をおくのが特徴的である。スラムへの訪問には必ず二、三名のスタッフが同行し、面接や聞き取

り調査には通訳（ベンガル語・英語）として協力いただいた。最初の四年間は研究テーマ「都市のインフォーマル経済」、そして、最後の四年間は「都市の不就学児童労働」の事例調査の対象となる。

(5) 社会的感性

つぎの論文二点はスラム内部に進行する社会意識の変化を扱った数少ない調査論文である。

Sudeshana Banerjee, "Displacement within Displacement: the Crisis of Old Age in the Refugee Colonies of Calcutta", in *Studies in History*, 2003; 19, 199.

Bhaskar Mukhopadhyay, "Crossing the Howrah Bridge: Calcutta, Filth and Dwelling Forms, Fragments, Phantasms", in *Theory, Culture & Society*, 2006; 23, 221.

(6) スラム内児童労働調査

時期は一九九七年二月中旬、酷暑の始まるころ。ベンガル語通訳はCRSスタッフ。聞き取り調査と記録の作成は次の諸氏があたった。山下美香子、白木朋子、松田朋子、立木麻奈美、長島恵子。本文の叙述はこれから報告書に負う。関係者の忍耐強い努力に敬意と感謝の気持ちを表したい。

(7) 子どもの労働実態

面接対象四〇人の子どものプロフィールを掲げる。労働開始年齢別に分類したが、本人が時期不明と答えたものについては（——）と記す。おそらく、このスラム地区の慣行としては四、五歳からこの種の仕事にくものと思われる。一人ひとりの重い幼少時代の一齣を読み取ってほしい。

表G. 子どもの労働実態

I. 労働開始年齢（～5歳）：pre-school(幼稚園) 対応年齢レベル****						
番号	性別	労働開始年齢	年齢*	家族数	仕事内容	仕事量/日**
1	女	4	14	7	チャッパル	2時間 (5～10 dz.)
2	女	4	8	7	紙袋	—
3	女	2	5	10	チャッパル	10個
4	女	3	11	8	チャッパル	6時間
5	女	4	6	8	チャッパル	1～1.5時間
6	女	4-5	8	9	チャッパル	5 dz.
7	女	5	9	8	チャッパル	1～1.5時間
8	女	5	11	8	チャッパル	3～4時間 (5 dz.)
II. 労働開始年齢 (6歳～11歳)：初等教育対応年齢レベル						
番号	性別	労働開始年齢	年齢*	家族数	仕事内容	仕事量/日**
9	女	—	6	7	クリーニンング	—
10	男	6	8	8	・アイロソ チャッパル	1～1.5時間
11	男	6	8	5	帽子のつば	1時間
12	女	7	11	8	チャッパル	1～1.5時間
13	女	7	13	7	チャッパル	4～5時間 (5～6 dz.)
14	女	8	11	7	チャッパル	—
15	男	—	7	6	チャッパル・屑拾い (除く日曜日)	1時間
16	女	—	7	8	チャッパル	—
17	男	—	8	10	チャッパル	7 dz. 13:00—16:00 4 dz.
						賃金***
						将来の夢
						—
						先生
						—
						先生
						弁護士
						医者
						500/600 Rs. (家族全体)
						—
						婦人警官
						先生
						先生
						10～20 Rs./週
						—
						30 P./1 dz.
						—
						弁護士
						50 P./1 dz.
						医者
						—

子どもの労働実態 (続き)

番号	性別	労働開始年齢	年齢*	家族数	仕事内容	仕事量/日**	賃金***	将来の夢
18	男	—	8	5	チャッパル	4時間 (姉と2人で) 125 dz.	30 Rs./週	—
19	女	8	12	10	チャッパル	2~3時間	25 Rs./週	先生
20	男	—	9	5	チャッパル	6 dz.	—	警官
21	男	—	9	6	チャッパル	12:00~20:00 5 dz.	50 P./1 dz. 不良品/5 Rs、 減給	医者
22	男	—	9	6	チャッパル	3時間	50 P./1 dz. 30 Rs./dz.	先生
23	女	—	9	6	チャッパル	4時間	50 P./1 dz. 20~30 dz./週	医者
24	女	—	9	—	チャッパル	—	—	—
25	女	9	12	7	チャッパル	2時間	—	先生
26	女	9	13	7	チャッパル	2時間	—	先生
27	女	9	12	6	チャッパル	2時間	15~20 Rs./ 50 dz.	勉強
III. 労働開始年齢 (11歳~14歳) : 前期中等教育対応年齢レベル								
番号	性別	労働開始年齢	年齢*	家族数	仕事内容	仕事量/日**	賃金***	将来の夢
28	男	—	10	2	チャッパル	10:00~12:00/ 16:00~21:00 3~4 dz.	50 P./1 dz. (10 P./年昇給)	先生
29	男	—	10	2	チャッパル	10:00~12:00/ 16:00~21:00 3~4 dz.	50 P./1 dz. (10 P./年昇給)	先生
30	女	11	13	7	手袋	5時間	25 Rs./500組	—
31	女	—	11	9	チャッパル	9:00~18:00 5 dz.	40 Rs./週	医者
32	男	—	12	13	チャッパル	13:30~21:00 5 dz.	50 P./1 dz.	医者

子どもの労働実態 (続き)

番号	性別	労働開始年齢	年齢*	家族数	仕事内容	仕事量/日**	賃金***	将来の夢
33	男	—	12	6	チャップル	16:00~19:00 5 dz.	40 P./1 dz. (10 P./年昇給) 30 Rs.	医者
34	女	11	13	7	紙袋	8~10時間 (480枚)	—	婦人警官
35	女	—	12	6	チャップル	13:00~21:00 200個 1時間	50 P./1 dz. (2年間で10 P./1 dz.昇給) 1.5 Rs./1千個 25 Rs./週	先生
36	女	12	14	5	帽子のつば	—	—	先生
37	女	—	13	5	チャップル	3~4時間 30 dz.	—	エンジニア
38	女	—	14	6	チャップル	11:30~22:30 25~30 dz.	30 P./1 dz. (2 Rs.小遣い)	—
39	女	—	14	6	チャップル	8:00~19:00 50~60 dz.	30 P./1 dz.	結婚
40	女	1ヶ月前	14	5	チャップル	3時間	—	先生

注 *年齢はインタービュ調査年1997年2月現在。仕事を始めたときの年齢で不詳は「—」とした。実際は一般的傾向として5-9歳低学年対応の年齢レベルと思われる。

**労働時間は作業場の拘束時間。作業量表記dz. はダースのこと。

***賃金単位：Rs. はルピー、P.はパイサ (1/100ルピーの単位)。

****不就学児童を対象として対応する年齢を西ベンガル州公立学校の学制、初等教育(6歳-11歳)、前期中等 (11歳-14歳) に置き換えて配列した。

出所：聞き取り調査に基づき筆者作成。

